

編集後記

今月号の特集は「治療体操の見直し」である。最近、テレビで治療体操がよくとりあげられ、リウマチ体操、腰痛体操、ぜんそく体操等々がしばしば放映されている。大へん結構なことではあるが、しかし、困った面もないではない。本特集の著者の1人、岡崎健氏は、常々、座談の中で、頸椎に変化のきたリウマチ患者に、頸の前屈運動は極めて危険であるので、やらせるべきではないことを強調しておられた。

さて、本誌は創刊以来満10年を経過したが治療体操を特集のテーマとしてとりあげたのは今回が初めてである。今回は治療体操の見直しとして、まず、治療体操の問題点について森健躬氏に総論的に述べていただき、つづいて石田肇氏に腰痛体操を、岡崎健氏にリウマチ体操を、馬場実氏に喘息体操を、松山栄吉氏に妊産婦の体操について解説していただいた。森健躬氏は治療体操全般にわたっての問題点として、患者の病態によっては禁忌となる運動もあること、医師が一般に治療体操に対する正しい認識を欠いていること、治療体操の処方が出されても定期的なチェックがなされないこと、患者に依存性がつく患者自身が努力して体を動かす治療などは治療で

はないと考える傾向がつよいこと、その他の諸点を指摘された。本特集は治療体操を見直す上に大いに役に立つことと期待する次第である。

巻頭言で桑原氏は大へんむずかしい問題を提起された。すなわち、癌の告知と同様、プラトーに達したことを告げることは、日本人においては適切ではない、との御提言である。筆者自身は、プラトーに達したことは告げるべきであり、身体の部分の死についても告げるべきであると考え、この障害の受容をのりこえてもらわなければリハビリテートすることは困難であると信じて、今まで患者に接してきたので、今回の御提言には衝撃を感じた。読者諸兄は果して如何にお考えであらうか。

研究と報告、調査報告各1篇はいずれも有意義な業績と拝見した。講座 CT、車椅子、一頁講座スプリントはいずれも第2回目であるが、いずれも臨床に直結した、利用価値の高いものであるように思われる。

終りに、創刊以来満10年を経過して、この「総合リハビリテーション」誌が今まででより以上に、愛読され、活用されることを期待してやまない。(横山 巖)

次号予告(第11巻 第3号)

特集 プライマリ・ケアとリハ医学

プライマリ・ケアとは何か……………伊予病院 木村 隆 徳
プライマリ・ケアの中でのリハビリテーション…川崎医大 山田 治・他
リハビリテーション医学の中での
プライマリ・ケア……………川崎医大 土肥 信 之
卒前リハビリテーション医学教育と
プライマリ・ケア……………横市大 大川 嗣 雄
座談会：プライマリ・ケアとリハ医学……………

(司会) 明石 謙、平野 寛・荻島秀男・兼松英夫

巻頭言 他力から自力へ……………城戸整形外科医院 城戸 正 明

研究と報告 電気刺激による麻痺筋の機能代償：
片麻痺内反足への応用を中心に……………大阪労災 川村 次 郎・他

講座 CT(3) 脳疾患のCT：脳神経外科の
立場より……………東京女子医大第二病院 神保 実・他

車椅子(3) 車椅子の処方と訓練……………国立身障リハセンター 木村 哲 彦

一頁講座 スプリント(3) 材料・加工法2：プラスチック①
……………川崎医大 土肥 信 之

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江口 壽榮夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加倉井 周一
賀 集 竹 子
河邨 文一郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長谷川 恒雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田、山田)